

中山間地域における農産物加工の取り組みの実態とその課題

- 大分県竹田市「みらい香房若葉」を事例として -

A Study on the Rural Activity of Farm Product Processing in the Hilly and Mountainous Areas

清水夏樹* 佐藤洋平*

*SHIMIZU Natsuki *SATO Yohei

1. はじめに

清水ら¹⁾は、中山間地域において、圃場整備（生産の物理的基盤の整備）を契機として実施された集団的転作と、生産されたそばや大豆の加工部門との連携が、農村基盤全体の持続的管理を実現するために効果的であることを明らかにした。本報告では、地域的な農村基盤管理において生産部門と加工部門の連携に取り組む大分県竹田市九重野地区の事例から、特に女性達の農産物加工の取り組みをめぐる基盤条件、基盤構成要素の関連性に着目し、実態および課題を明らかにすることを目的とした。

2. 女性協議会「若葉会」をめぐる農村基盤条件

大分県竹田市九重野地区では、1993年度より県営担い手育成圃場整備事業が実施され、地区内7つの集落全域にわたり圃場条件が改善された¹⁾。同時に事業に伴う補助金により、九重野担い手育成推進協議会を調整機関とした4つの組織が設立された。そのうち、女性協議会「若葉会」は、大豆・そば等の農産物加工品の開発・生産を担う部門として1998年5月に設立された。当初より加工施設は、地区内の農村基盤管理の1基盤要素として計画されており、中山間地域等直接支払制度の交付金を利用して加工施設が建設された。2002年4月に加工施設「みらい香房若葉」の利用が始まった。「若葉会」には、集落内での「頼母子講」

や地区特有の盆踊りを練習する「緩流会」のネットワーク、ヒールマンや肉牛等経営を通じたネットワークが存在し、地区内に居住する既婚女性の多くが参加していた。さらに、加工品の販売は、竹田市と大分みどり農協が出資して設立された（社）竹田市わかば農業公社がアンテナショップ事業を展開しており、加工品の委託販売が可能であった。すなわち、「みらい香房若葉」での農産物加工活動を開始するに当たって、物理的な基盤条件及び社会的な基盤条件はある程度整っていたと言える。

3. 「みらい香房若葉」の運営実態

「みらい香房若葉」では、毎日、地区内で生産された大豆・小麦・水稻を加工し、豆腐（青豆腐）、酒まんじゅう、ゆでもち、つきもち、おにぎりを出荷している。「若葉会」会員は2グループに分かれて一日おきに活動しており、朝7時の出荷に間に合うように午前2時から準備を始めて後片づけが終わるのは午後1時頃である。出荷する加

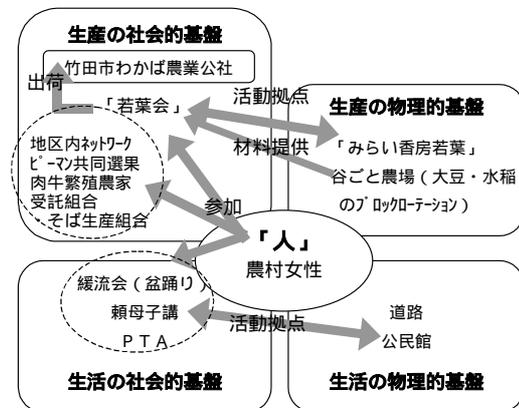


図1 「若葉会」をめぐる農村基盤条件

*東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate school of Agricultural and Life Sciences, The Univ. of Tokyo キーワード：農産物加工，女性協議会，商品の競合

工品の製造のほかにも、当該地区を訪れる視察研修団体、あるいはイベント来訪者への茶菓・食事の提供も行われている。

4. 「みらい香房若葉」運営における課題 「若葉会」構成員の変化

平成10年の「若葉会」設立時には、地区内農家の全既婚女性78名が会員として名前を連ねていたが、地区の取り組みの推進体制がほぼ確立された平成12年には、若葉会会員は積極的にイベントや農産物加工に参加する人と、助言のみあるいは手が足りないときに頼まれて出る人とは分かれていった。さらに、加工施設が建設され、常時農産物加工を行うことになった平成14年には、高齢あるいは農作業の忙しさを理由に活動会員は減少し、現時点で実際に活動しているのは14名である。この14名は居住集落やネットワークへの関わりにより3つのグループに分けられ、グループAは自動車の運転をしない人が多く出荷が担当できない、グループCは農繁期には手伝えないことを条件に参加しているなど、加工活動への「人」の参加の不足が課題である。

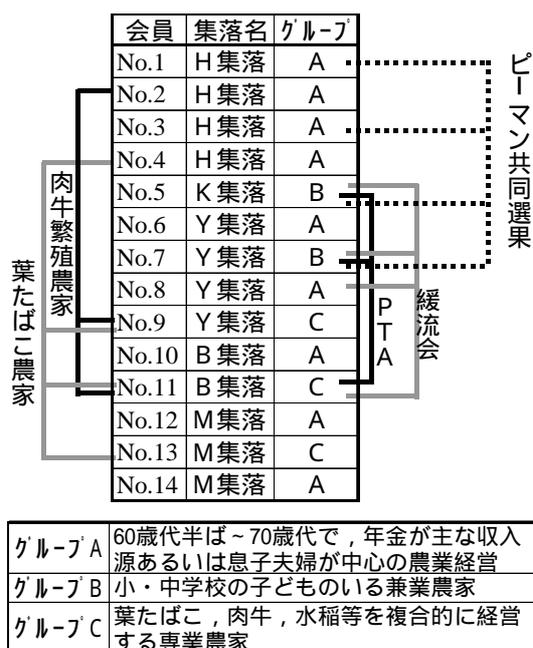


図2 加工活動を行う会員の状況

販売における他の加工組織との競合

(社)竹田市わかば農業公社のアンテナショップ事業を利用して農産物加工品を委託販売している加工組織は主なもので6組織あり、「みらい香房若葉」もこの中に含まれる。そのうち、豆腐は2、酒まんじゅうは4、ゆでもちは5、つきもち4カ所の組織が生産している。同じ生産物を同じルートで販売するため、協議会が開催され、曜日や店舗、イベントの割り振りが行われているが、早期から販売している加工組織に比べ、2002年7月から委託販売を始めた「みらい香房若葉」の加工品は販売不振が問題となっている。

経済的活性化と文化的活性化^{注1)}

「若葉会」会員減少の理由の一つとして、会員間での「みらい香房若葉」運営に対する意識の差異がある。年齢や関わりのあるネットワーク、夫や家族の意見が影響を与えており、夫が地区内のリーダー的存在である会員は農産物加工に経済的活性化を求める傾向にあるが、小中学生の子どもがいる会員や、自家農作業に従事する会員は、女性同士で共同作業を行うことに意義を見いだしており、文化的活性化を求める傾向にある。以上から加工施設および「若葉会」が、生産・生活の両側面において多様な機能を発揮しており、地区の農村基盤管理の仕組みにおいてもその多機能性を踏まえた位置づけが必要であることがわかった。

本研究は、平成14年度矢口光子記念研究奨励事業により実施された。

注1)「経済的活性化」「文化的活性化」という語句は文献2)による。

【引用・参考文献】

- 1) 清水・佐藤(2001): 中山間地域における農地の地域的管理, 農村計画論文集第3集, pp.193-198
- 2) 渡邊麻由子(1998): 地域活性化における農家女性の起業活動, 1998年度日本農業経済学会論文集, pp.462-464